

アクセントの変動あれこれ

中村雅之

1. 中国語の声調 (tone) : 「一年級」の場合

現在のほとんどの中国語教科書では「一年級」を「yī niánjí」と読むことになっている。20年ほど前までは「yì niánjí」の方が主流であった。発音の規範化が順調に(?)進んでいるということであろうか。

数字「一」の声調は単独では第1声であるが、量詞などが後続する場合の発音はやや複雑で、初級のクラスにおいて学生が苦勞する部分の一つである。そのルールは二つからなる。(1) 後続の声調が第4声の場合には「yì」と第2声に読み、後続がそれ以外の声調ならば「yī」と第4声に読む。(2) ただし「一」が順序を表す場合(すなわち序数の場合)には常に「yī」と第1声に読む。以上が原則である。

「一年級」は「一番目の学年。一年生。」ということであるから、ルール(2)が適用され、「yī niánjí」と読むのが理に叶っていることになる。にもかかわらず、今でも「yìniánjí」と発音する人が少なくないのは、この(2)のルールが比較的新しいものであることに起因する。1970年代以前に作られた教科書では「一月」「第一個」などにおいても「一」を第2声で表記したものがかなりあったし、そう発音する中国人の先生もいた。

(1)が口調上のルールであるのに対して、(2)は語義・語法上のルールである。一般にアクセントの変動は類推によるルールの一般化という形で起こるが、漢語の「一」のように2種類のルールが衝突する場合、せめぎ合いの期間がある。「一」の場合のように、新しいルールが理論的裏付けをもち、かつ規範として教育の場で後押しされる時には、やがて上位に立つことになる。

2. 英語の強勢 (stress) : 「kilometer」の場合

英語の「kilometer」には現在「kilometer」と「kilometer」の2種の発音がある(下線部が強勢位置)。語源的には「kilo-」を含む「kilogram」「kilowatt」、および「-meter」を含む「centimeter」「millimeter」から見て、第1音節に強勢が来るのが本来の姿である。ところが、「thermometer」「barometer」「speedometer」のように「-ometer」型では「-o-」に強勢が来ることから、徐々に「kilometer」が増加傾向にある。

この場合、前者が語義・語法上のルールであり、後者が口調上のルールである。ここでも二つのルールが衝突しているが、双方ともによく用いられ、まだ完全に一方には収束していない。「計測器」を意味する形態素を含む「-ometer」型の方が新しい形式であることを考慮すると、やがて「kilometer」が優勢になるのではないかと想像されるが、中国語における「一」のように理論的な裏付けも教育の場での後押しもないため、簡単には決着がつかそうにない。特に、「kilometer」における「-(o)meter」が「計測器」とは無縁であり、語源を考慮する時には理論的に「kilometer」に分があると考えざるを得ないため、辞書や発音辞典において「kilometer」が推奨されるまでには少し時間がかかりそうである。

英語においてはこれ以外にもアクセントの変動が多く語で進行中である。例えば、比

較的長い語で語頭に強勢を持つものは、強勢位置が後ろに移動する例が増加しつつある。したがって、「kilometer」の例をそのような大きな流れの中でとらえることも可能である。そして「kilometer」が圧倒的な使用率を獲得した場合には、それを引き金として、他の「kilo-」に始まる語にも強勢位置の変動が生じる可能性がある。

3. 日本語の高低 (pitch) : 「さくら」の場合

日本語の標準的な発音では、植物の「桜」は「低-高-高」型であるが、人名では「高-低-低」と発音される。「さくらが好きだ。」において、植物が好きなのか、人物が好きなのかは、ピッチ・アクセントによって区別される。

しかし「あんず」や「つばめ」が人名に用いられたとしても、やはり「低-高-高」で発音されるであろう。はたして「さくら」は特殊な例にすぎないのであろうか。

実は2音節の名前(姓名の「名」)では、その原義にかかわらず全て「高-低」型になる。「ゆり」「きく」「うめ」は植物を指す時には「低-高」型であるが、人名では「高-低」型である。動物の「くま」「とら」なども人名では「高-低」型になる。そして3音節の名前でも、「〇〇子」式の名前は例外なく「高-低-低」になる。

以上は、人名の場合には一般名詞と異なり、第1音節を高く発音する傾向があることを示している。このルールはおそらく2音節の名前から始まって、徐々に拡大してきたものであろう。伝統のある名前において「高-低-(低)」となる傾向が顕著である。「さくら」はそのような傾向の中で、一般名詞と区別して人名であることを強調するために「高-低-低」型で安定したものと思われる。

現段階では、人名において第1音節が高いという傾向はまだルールとして確立していない。将来のことは当然わからないが、一般名詞において平板化(「低-高-高」)が進みつつある現状からすれば、それと区別するために人名での「高-低-低」化がさらに進む可能性はある。

4. アクセントの変動

以上、声調・強勢・高低をアクセントという枠でひとくくりにして雑感を述べた。アクセントの変動は多くの言語でしばしば見られる現象であり、実のところ、個々の事例はわざわざ論じるほどの問題でもない。しかし、多くの言語において、アクセントの変動がさらに語形の変化、あるいは文法体系の変化を誘発することがあり、言語観察の興味深い一分野であることは確かである。

アクセントについては、語の単位のみならず、句の単位でも考えるべき問題は多い。中国語では3声(三声)が3個以上連なった場合にどの声調で読むか(「wǎng zǎo guǎi」など)という問題、英語では「English teacher」が「イギリス人の先生」か「英語の先生」かで強勢の位置が違うという問題、日本語では「愛知県立大学」を「高-低-低…」と「低-高-高…」のいずれかで読むかなど、一般になされる説明がどれだけ現実を反映しているか、あるいはいかなる説明が妥当なのか、どれも興味を引かれる問題である。